

## 現代における言語意識と言語理論の特徴

村 越 行 雄

言語は、それを取り囲む環境の変化に伴い、構造の面においても、また機能の面においても、変化するものである。そして、時間的および空間的制約の下で変化する言語に対して、人々が持つ意識も、また人々が作り出す理論も移り変わってくるのである。つまり、時代とともに、地域ごとに、言語は変わり、人々の意識も、またその理論も変わるのである。このことは、言語が発生してから、今日に至るまでの過程を見てもはっきりしていることである。ところが、現代は「言語の時代」である、という言葉を目にするが、なぜ現代をとくに「言語の時代」とするのであるのか。

### 「言語の時代」

現代を「言語の時代」とする特徴を欧米において見ることにする。言語誕生以来、言語を基にした人間生活が営まれ、言語が人々の関心の的となり、人々の言語意識は高まり、それに従い、言語を研究対象とした動きが生れ、言語理論が徐々に形成されてきた。その典型的な例として、古代ギリシャ時代の代表的な哲学者であるソクラテス、プラトン、アリストテレスなどに見られる言語意識の高揚と言語理論の形成が挙げられる。それ以来、彼らの理論を起点としながら、中世、近代を経て、今日に至るまで、種々の諸理論が発生・消滅し、その繰り返しの過程を通して今日の状況がある。そして、その背後には、時代とともに移り変わり、地域ごとに異なる、人々の言語意識が存在してきたのである。このような歴史的過程を見ると、程度の差はあるが、どの時代において

も、人々の間には言語意識が存在し、言語を対象とした（直接的であれ、間接的であれ）研究が行なわれてきたが、とくに現代（ここでは、第二次世界大戦以降とする）においては、強い言語意識の高揚に裏付けされた、言語を直接対象とした本格的な研究がなされてきている。

「言語の時代」と呼ぶに相応しい程、第二次世界大戦以降に刊行された、言語を直接の研究対象とした著書、論文の数の多さには驚くべきものがある。こうした驚くべきほどの数の著書、論文の中にあつて、現代の哲学、言語学に最も偉大な影響力を及ぼした（そして、今も続いている）とされているものがある。それは、サール（John R. Searle）によると（*The Philosophy of Language*, P.12. 同様の事は、Steven Davis, *Philosophy and Language* にも見られる。この著書は、最も重要な言語理論としてのオースティン、チョムスキー、クワインの三理論の分析・検討から構成されている。）、クワイン（W. V. O. Quine）に代表される記号論理学、オースティン（J. L. Austin）に代表される言語行為論（日常言語分析）、チョムスキー（N. Chomsky）に代表される生成文法理論の三つである。これら三つの言語理論（記号論理的側面、言語使用的側面、言語構造的側面にかかわる言語理論）は、サールのみならず、だれしものがその存在意義の大きさを認めるところのものであろう。勿論、これら三言語理論だけで現代の言語思想を全て言い尽くしているとは言えないが、現代の言語思想における主流を成すものであると言っても構わないであろう。

第二次世界大戦以後に活発化し、今日に至るまで続いている本格的な言語研究活動が、現代を「言語の時代」とすると特徴付けさせている要因となっているが、更に人々の間に存在する言語意識と言語理論が合致したこともその要因となっている。それは、言語意識の対象となる言語と言語理論の対象となる言語が共に日常言語であるという点で一致していたことなのである。つまり、一般の人々が持つ言語意識というのは、日常生活の中で、実際に日々使用している言語、人間同志のコミュニケーションの為に使用される言語に対する意識であり、そして正にこの日

常言語を研究者が自らの研究対象として言語理論を作り上げてきたことなのである。このような特徴を端的に表わしているのが、オースティンに代表されるような言語思想なのである。以上のような意味で、第二次世界大戦以後に活発化した本格的な言語研究活動が存在したこと、そしてその中で、とくに研究者が自らの研究対象を日常言語としたことにより、一般の人々の持つ言語意識と合致したことが要因となって、専門家の間だけでなく、広く一般に「現代は、言語の時代である。」と言われるようになったのである。

### 言語意識と言語理論

一般の人々が日常言語に対して持つ意識とそれを中心課題として取り組む研究者の理論とが同一対象を扱うという点で合致したことが、現代の言語思想の特徴であると言えるならば（少なくとも現代言語思想における一つの主要な流れであることは間違いないであろう）、そうした特徴を持った言語意識そして言語理論とは、どのようなものなのであろうか。

最初に、現代における言語意識の問題がある。これは、当然歴史的背景の中で扱わなければならない問題であり、歴史的事例を挙げながら実証していくべき問題であるが、ここでは簡単に触れるだけしておく。第二次世界大戦以後に現われた日常言語に対する意識の高揚は、それなりの原因があった。その一例として、政治の民主化と経済の活性化・国際化などが考えられよう。大戦後、政治を民主化し、経済を活性化し、更には国際化していくことが緊急の課題であったし、その中であって個人の権利意識は高まり、日々営まれている日常生活の大切さの認識は強まった。それは、個人の権利が制限され、日常生活が圧迫されていた大戦以前に対する反省（あるいは、反動）でもあった。そして、それが大戦後の政治の民主化と経済の活性化・国際化の進行に伴い前面に出てきたのである。つまり、人々は個人の権利を守り、効率よく行使する為に、また日常生活を円滑に営み、満足を得る為に、コミュニケーションが果

たす役割の重大さを認識せざるをえなくなり、こうした認識は、経済の活性化によって地域間の移動が容易になり、国際化によって国家間の移動も容易になるにつれて、更に強まったのである。そして、それによって日常言語に対する意識が大きく高揚したのである。ともかく、今日見られるように、現実的で、実用的で、しかも即時的な見方が現代の特徴であると言え、このような見方をする人々が持つ言語意識が日常言語に対するものであるのも自然であろう。しかし、これは決して否定的意味で言っているのではなく、現実重視という積極的態度と取るべきものである。その意味で、言語の民主化と言えるものかもしれない。

次に、現代における言語理論の問題がある。ここで扱うのは、日常言語を対象とした言語理論である。例えば、絶大な支配力を保持していたヘーゲルの観念論の下で抑圧され、制約を受けていた個人の存在価値と意義を復活させようとしたムーア (G.E. Moore, "The Refutation of Idealism", 1903) は、日常言語を基準に物事を判断しなければならないという意識を持った。そして、このような考え方がいわゆる「日常言語」哲学あるいは学派と言われるようなものになったものである。それが大戦以後にオックスフォード大学に移り、大きな発展を遂げたのである。このオックスフォード大学における「日常言語」学派の代表的哲学者がオースティンであり、ライル (Gilbert Ryle) であった (他に、S.E. Toulmin, H.L.A. Hart, R.M. Hare, P. Nowell-Smith, P.F. Strawson, J.O. Urmson などがいる)。その後、この「日常言語」の流れは、イギリスからアメリカ、その他の国々へと大きく広がり、日常言語に関する言語研究活動は一層盛んとなり、多くの理論的功績を残してきたのである。そこには、一般の人々の言語意識の高揚に先だって、研究者が思想・理論において個人の存在意味と意義を明確にすることによって個人の解放を目指し (個人の存在を軽視あるいは無視するようなヘーゲルの観念論に反発し、また社会的・政治的・経済的に一般の人々が実際に受けていた個人の権利への制約・抑圧を認識し、その上での個人の解放)、新たな言語理論を作り上げていき、その言語研究活動が次第に

一般の人々の言語意識の高揚に影響され、更に活発になるという相乗作用が働いていたのであった。歴史の経過においてみられるように、日常言語を軸としながら、一般の人々の言語意識と研究者の言語理論の間で相乗作用が働き、日常言語に関する理論は、質的にも、量的にも、発展し、現在もなおその発展は続いているのである。

### 日常言語に関する理論の特徴

日常言語を対象とした言語理論の特徴は、現実には日常的な生活を営んでいる人間を主人公として登場させていることである。言い換えれば、日常生活において、言語を手段として使用しながらコミュニケーションを行なっている人間を中心に据えている為、「人間（話し手と聞き手）」、「話し言葉」、「コミュニケーション」、「手段」、「行為（行動）」、「文レベル」、「会話・談話」などの概念が基本的な構成要素となって、理論が形成されているのである。他の理論との相違点は、言語をその使用状況から完全に切り離して、言語をそれ自体として分析するのではないこと、そして純粋言語的分析を否定するのではなく、あくまでもそれを基礎としながら、言語使用状況が実際にどうなっているかを分析することにある。簡単に言えば、純粋言語理論としてではなく、言語使用理論としてあると言っていいであろう。そして、純粋言語理論と言語使用理論が相反し、しかも相容れないものとして議論されることがしばしばあるが、言語を純粋に言語学的に分析する場合と使用状況において分析する場合（話し手—言語—聞き手の関係）というように、元来扱う対象が異なる訳で、前者の否定によってのみ後者の存立があるという関係ではなく、前者を前提として後者が論じられるのである。

実際の言語使用状況から判断すれば、話し言葉の占める割合が書き言葉の場合よりも遙かに大きいのは明らかで、当然話し言葉に関心が向けられ、その中でも二人の間での会話に的が絞られる。それは、二人の間の会話において、話し手—言語—聞き手の関係がより鮮明に浮彫りにさ

れ、分析しやすいからである。そして、それを基本型として、電話での会話（直接相手の表情などが見られない）、演説、講演（相手の返答がないか、あっても時間のずれがある）などの種々の種類の話し言葉の形態、手紙、電報（書き手—言語と言語—読み手の間に時間のずれがある）、本（その時間のずれが更に大きく、相手の反応が伝わらない）などの種々の種類の書き言葉の形態へと適用していくことができるのである。その基本型とは、二人の間の会話において、「話し手」が「コミュニケーション」の為の「手段」として言語を使用し、「話し言葉」の形態で自らの伝達意図を「聞き手」に伝える。そして、返答する場合、「聞き手」が「話し手」となって同様の事をする事になり、そこでは単語レベルが直接問題となることはなく、また文法構造も直接問題になることはなく、「話し手」がある文（あるいは表現）を言って、それにより自らの意図を伝えようとし、「聞き手」はその文（あるいは表現）の意味の理解を通して伝達意図を把握しようとするのであるから、「文（あるいは表現）レベル」が問題となる。単語・文法レベルではなく、「文レベル」が問題となるのは、単語・文法によって文の意味が理解できても、それが直ちに「話し手」の伝達意図の把握に結び付かない場合（文の文字どおりの意味が理解できても、それだけでは伝達意図が把握できない場合）がある為で、文自体を会話状況の中でとらえ、文の発話を一種の「行為（行動）」としてみていく必要があるからで、それに会話における最小単位が文（あるいは表現）にあるからである。そして、会話状況の分析が、二人の間の会話であるといっても、従来二つの文の関係として分析されてきたこともあって、文の連続としてある「会話・談話」の分析の必要性が出てきたのである。

以上のように、「人間（話し手と聞き手）」、「話し言葉」、「コミュニケーション」、「手段」、「文レベル」、「行為（行動）」、「会話・談話」という構成要素から成る基本型を分析・検討してできた言語理論が日常言語を対象とした言語理論であると言えよう。そうした理論の内、すでに古典的と言われているが、オースティン・サールの言語行為論 (Austin, *How*

to Do Things with Words, 1962; Searle, *Speech Acts*, 1969, “Indirect Speech Acts”, 1975, *Intentionality*, 1983), ストローソンの前提理論 (P.F.Strawson, “On Referring”, 1950, “Identifying Reference and Truth-Values”, 1964), グライスの会話含意理論 (H.P.Grice, “Logic and Conversation”, 1975) がその影響力の大きさから見て重要な理論である。これら哲学者の理論は、言語哲学の分野は勿論のこと、言語学の分野においても重要な位置を占め、とくに語用論における中心的な理論となっている。そして、現在では種々の分野・領域で研究されているものである。

### 言語行為論、前提理論、会話含意理論

日常言語を対象とした理論の内、言語行為論 (speech act theory)、前提理論 (the theory of presupposition)、そして会話含意理論 (the theory of conversational implicature) が主要な理論としてあり、現在では多くの様々な分野・領域で研究され、理論的發展がなされてきており、種々の適用・応用が試みられてきた。これら三理論は、古典的とされているが、現代の日常言語理論の出発点であり、しかもその基礎的部分を成すものであると言える。そこで、その三理論を上記の基本型から簡単に述べてみることにする。

理論的功績が最も認められ、しかも現在なお強い影響力を及ぼしているのが言語行為論である。それは、*How to Do Things with Words* (1962) におけるオースティンの言語行為論を出発点とし、それを受け継いだサールが多少の修正を加えて、*Speech Acts* (1969) で自らの理論を示し、彼らの言語行為論を基にして、大きく、しかも力強く広がっていったのである。オースティンの言語行為論における重要な点は、発話を一種の行為である (to say something is to do something) とし、更に発語行為 (locutionary act, 発語行為を音声行為 (phonetic act)、用語行為 (phatic act)、意味行為 (rhetic act) に分類する)、発語内行為

(illocutionary act)、発語媒介行為 (perlocutionary act) に分類したことである。つまり、何かを言うということは、それ自体で何かを行なうことであり、発語すること自体が発語するという行為を遂行することなのである(発語行為)。より具体的に言うと、最初に口から音を発し(音声行為)、その一連の音が文(単語と文法)を成し(用語行為)、しかもその言った事の意味(意味 (sense) と指示 (reference)) がはっきりしていなければならない(意味行為)。そして、何かを言う時、単に発語行為を遂行するだけでなく、同時に何かを言いながら別の何かを行なうのであり、ただ単に言葉を発するだけでなく、実際に約束したり、命令したり、警告したり、忠告したり、その他の事を行なうのであり、それが発語内行為なのである。それは、何の意図もなく、何の目的もなく言うのではなく、ある目的を持って相手に言うのであり、言った事がある一定の方向で受け取られ、理解されるように意図されるからである(発語媒介行為は多くの問題を抱えているので、ここでは説明しないでおく)。このようなオースティンの分類に修正を加えるサールの分類は、音声行為、用語行為、命題行為 (propositional act)、発語内行為というものである。その分類の相違はともかく、基本的には同様の考え方であると言える。

会話における話し手の発話は、以上の事全てを同時的に行なうものとしてあり、聞き手はそれら全てを理解・把握しなければならない。これがオースティンによって解明された会話のメカニズムである。会話において、話し手はある伝達意図を持って、それを聞き手に伝える為に、言語をコミュニケーションの手段として利用する訳で、話し手の伝達意図を聞き手まで運ぶ道具である言語は、会話における最小単位である文(あるいは表現)で、単語・文法レベルで明らかになる文の純粹言語的意味ではなく、その文が会話において伝達意図を運ぶ道具の一単位としてある文レベルで明らかとなる伝達意図が最終的に問題となるのであって、それを聞き手が把握して初めてコミュニケーションが成立することになる。そして、純粹言語的意味から伝達意図への移行を可能にさせている

のが行為論である。発話を一種の行為ととらえ、発話において発語行為と同時に発語内行為をも遂行されるとすることにより、発話される文の純粹言語的意味のみならず、その文によって運ばれる伝達意図をも含ませることができるからである。とくに、用語行為、意味行為、発語内行為に注目して言えば、what a sentence means (用語行為), what a speaker means by a sentence (意味行為), what a speaker means (or intends) to do by uttering a sentence (発語内行為) の関係によってはっきりするであろう。これら三行為は、実際には同時的に遂行されるのであるが、分けて考えると、そして文の所に This room is hot を入れて考えると、その意義は明らかとなろう。用語行為段階では、単語・文法レベルの問題で、一つ一つの単語の意味と文法が分かれば、その文の純粹言語的意味が理解できるが、ここには話し手(ある特定の会話状況)はまだ登場せず、伝達意図も問題とならない。意味行為段階では、話し手(ある特定の会話状況)が登場し、文レベルの問題となるが、しかしまだ伝達意図は関係なく、ある特定の会話状況で話し手がその文を発話する時、元来意味 (sense) と指示は状況によって異なるものであるから、その意味 (sense) と指示を特定化し (例えば、this room が具体的に何を指すか)、それにより話し手がその文によって意味することが分からなければならず、ここでは会話状況に左右される意味 (sense) と指示、そして会話状況には関係ない、文自体の純粹言語的意味の両者が存在する。発語内行為段階では、話し手(ある特定の会話状況)が前面に出て、伝達意図が中心問題となり、ある特定の会話状況で話し手が文 This room is hot を発話することによって意図するものが、例えば、この部屋は暑いので、窓を開けてくれないかという依頼であるならば (あるいは、エア・コンを入れてくれないか、外で話そう、冷たい飲み物を出してくれないか、など)、その文の純粹言語的意味が直接問題となるのではなく、あくまでも伝達意図を運ぶ文レベルの問題なのである。このように、純粹言語的意味から伝達意図への移行、単語・文法レベルから文レベルへの移行、言語自体から話し手(ある特定の会話状況)への移行、目的と

しての言語から手段としての言語への移行は、それら三行為の段階的過程においてなされ、意味行為段階が中間的位置を占めることになる。以上のオースティンの言語行為論は、前述の基本型を最もよく表わしており、その意味で、現代の日常言語理論における中心的役割を果たしてきたと言えるのである。そして、以上の解釈が正しいとするならば、純粹言語的意味が無視あるいは否定されているとか、純粹言語的意味が話し手あるいは会話状況に左右されるとか、その他の類似したオースティン批判は、誤解によるものと言える。発語内行為段階に重心が置かれた為に生れた誤解であろう。

オースティン言語行為論を基本的には受け入れるストローソンは、オースティンと同様、日常言語を擁護する立場に立ち、複雑で、込み入った、しばしば矛盾しあう会話状況を決して単純化し、形式的に処理するのではなく、あくまでも実際の会話状況に即した分析を重要視し、言語使用理論を展開するのであるが、オースティン言語行為論に先だって、自らの前提理論 (“On Referring”, 1950, “Identifying Reference and Truth-values”, 1964) を作り上げた。ストローソンの前提理論は、元々ラッセル (Bertrand Russell) の “On Denoting” (1905) を批判し、ラッセルの批判対象であったフレーゲ (Gottlob Frege) の意味 (sense) と指示の区別 (“On Sense and Reference”, 1892) を復活させ、それに自らの視点を加えることによってできた指示理論の中で展開された理論である。それは、前述のオースティンの分類を使用すれば、意味行為段階に関わる問題で、用語行為段階との関係で論じられる。つまり、言語的側面と言語使用側面の関係が直接の対象であるが、フレーゲの意味 (sense) と指示の区別を意味 (meaning) と指示の関係として論じていることから分かるように、オースティンの意味行為段階における意味 (sense) と指示の関係としてではなく、その意味行為段階の指示と用語行為段階の言語的意味の関係としてであると位置付けられよう。従って、オースティン言語行為論で見られた基本型全般の解明がなされる訳ではなく、その構成要素の内の一部が解明されるにすぎない。

例えば、The king of France is bald という文が発話される場合、その文の一部である the king of France という指示的表現 (a referring expression) の指示対象であるフランス王が存在していないのに、なぜ意味のある文であると言えるのであろうか。指示対象が欠落している文なのに、なぜ意味のある文になりえるのかという問題を提起したのがラッセルであり、それに答えたのがストローソンであった。彼の解決策とは、文 (指示的表現を含む文) と表現 (文の一部としてある指示的表現) に先ず区別し、更にそれぞれを三区分し、文、文の使用、文の発話、表現、表現の使用、表現の発話というようにし、とくに文および表現と文の使用および表現の使用を中心にそれぞれを特徴付けて、その相違から問題解決の糸口を見付け出していくものであった。このような区分の仕方からも読み取れるように、言語段階 (文、表現) と言語使用段階 (文の使用、表現の使用) の相違は明確で、それは、純粹言語的意味を持つ特質と、ある特定の会話状況で実際に言語が使用される場合の特質 (ここでは、まだ伝達意図は問題とならない) の相違によるものである。このような特質から判断して、意味 (文の意味、表現の意味) は言語段階に属し、指示すること、言及することは言語使用段階 (表現の使用) に、また真偽について述べることは言語使用段階 (文の使用) に属することになる。文を s とし、表現を e として言えば、

s's meaning on all occasions

e's meaning on all occasions

you use s to make a true or false assertion …… on a particular occasion

you use s to talk about …… on a particular occasion

you use e to refer to …… on a particular occasion

you use e to mention …… on a particular occasion

というようになる。このようにして純粹言語的側面としての意味と言語使用的側面 (表現の使用) としての指示を区別した上で、話し手が文 The king of France is bald をある特定の会話状況で発話する場合、そ

の指示的表現の指示対象であるフランス王の存在をその文の意味の一部として含めて一緒に主張するのではなく、あくまでもフランス王の存在を前提としてその文を主張すると言えるのである。指示（つまり、指示対象の存在）は意味の一部としてある訳ではなく、実際の発話の際に話し手が前提とするものであるから、The king of France is bald の場合、純粹言語的側面から見れば、フランス王の存在とは関係なしに、その文自体として意味はあるが、言語使用的側面から見れば、その文の主張の際に前提とされる指示対象であるフランス王が存在していない以上、その主張をどう判断するかという問題自体が生じないことになる。以上のようにして、ラッセルによって提起された問題は、指示（あるいは指示対象）を意味と区別し、話し手による前提とし、しかも意味を純粹言語的側面としての意味に限定することによって解決されることになる。そして、そのような意味が持つ機能とは、実際の会話における使用可能範囲の一般的な枠を与えることであって、それ以上ではないのである。

言語使用の問題の重要性を強く主張するストローソンにとって、ある特定の会話状況における話し手の発話に焦点を合わせることによって意味と指示の区別、そして前提を明確にすることは、大いに意味のあることであったが、逆にその扱う対象が限定されていた為、言語使用問題と全面的に取り組むことができず、前述の基本型の全貌ではなく、その一部の解明に終わった。しかし、これはオースティン言語行為論にとって補完的役割を果たすものと言え、また逆も言えるのであるから、ストローソン前提理論とオースティン言語行為論とは、ある意味で、相互補完関係にあると言っていいかもしれない。つまり、オースティン言語行為論において十分に、しかも明確に解明されなかった用語行為段階（純粹言語的意味）と意味行為段階（意味 (sense) と指示）がストローソン前提理論によって補完され、それに対してストローソン前提理論において対象外であった発語内行為段階（話し手と伝達意図）がオースティン言語行為論によって補完されるという具合に、相互に補完しあう関係にあると言え、そのことにより会話の基本型の全貌解明が可能になると考えら

れるからである。ただ、両理論においても、純粹言語的意味それ自体の解明が直接の分析対象でなかったという点で共通している（このことは、決して言語的意味の解明の重要性を否定するものではなく、むしろ従来の、そして現在も続いている研究を評価・尊重し、その上において言語使用の問題に取り組んでいると考えるべきであろう）が、ストローソンは少なくとも言語的意味の意義と限界を明らかにしている。それは、言語的意味をあくまでも純粹言語的側面に限定し、そのことが同時に実際の言語使用の際の使用可能範囲の一般的な枠を与えることができることになるということである。

“Logic and Conversation” (1975) において展開されるグライスの会話含意理論は、上記の両理論と同様に純粹言語的意味自体を直接の分析対象としない点で共通しているが、その理論の特徴は、会話場面と本格的に取り組む（会話の原理・原則の問題）、そこにおける話し手と伝達意図と聞き手の関係を解明すること（会話含意の問題）が中心にあることである。

会話というものは、本来会話参加者間の協調性に基づく協同作業の結果として生れてくるもので、会話参加者各人がある一定の共通目的あるいは方向性を持って進められることを自ら受け入れることによって成立するもので、従ってそこには協調の原理 (cooperative principle) が存在していると言え、更に協調性に基づく協同作業としての会話を最大限に効率のいいものにする為に、量、質、関連性、様式の四原則から成る会話の原則 (conversational maxims) が存在すると言え、簡単に言えば、正直に（質）、関連性を持たせて（関連性）、明確に（様式）、しかも必要な情報を十分に与える形で（量）話さなければならないことになる。しかし、実際の会話では、協調の原理に従わなければ、会話そのものが成立しなくなるので、少なくとも協調の原理には従うであろうが、会話の四原則をいつも守っているとは限らない。例えば、正直に話さなかったり、十分な証拠もなしに話したりする場合もあれば、関係のないことを話したりする場合もあれば、あいまいに、長々と、順序だてずに話した

りする場合もあれば、不必要な情報を与えたり、必要な情報を十分与えなかったり、十分以上に与えたりする場合もある。もし、協調の原理と会話の四原則がいつも必ず従われ、守られるのであれば、発話される文の言語的意味の理解だけで話し手の伝達意図を聞き手が把握できる（全てそうであるとは言えないであろうが、少なくとも殆どの場合そう言える）が、日常的な会話では、そうでない場合が一般的であると言ってもいいくらいである。たとえ理由が何であれ、ある理由で会話の原則を守らない（一つか、一つ以上の原則を守らない）場合、発話される文の言語的意味の理解だけでは話し手の伝達意図が聞き手によって把握されず、従ってこのままでは会話は成立せず、コミュニケーションが成立しなくなる。ここに言語的意味と伝達意図の間の食い違いが生れ、ある特定の会話状況で、ある文が発話される時、話し手によって含意されているものを理解しなければ、話し手の伝達意図を聞き手が把握できないことになる。例えば、「どこかに出掛けないか。」(r)という質問に「雨が降っているね。」(p)と返答する場合、一見pはrに対する返答になっていないように思える。ところが、もし話し手がpと言うことによって「出掛けるのは止めよう。」(q)を含意しているのであれば（少なくとも協調の原理に従っている訳で、pは何らかの形で返答になっていることを聞き手が状況判断で解釈できると話し手が考えるので）、pは間接的な返答になっている。そして、聞き手はpを聞いて、話し手がpを言うことによってqを含意していることを理解すること（話し手が少なくとも協調の原理に従っていると考え、従ってpによってqを含意していることを聞き手は状況判断で解釈し、その解釈を基にして理解すること）になり、話し手の伝達意図を把握できることになる。このように、会話には言語段階と会話含意段階があると考えられ、もし言語的意味の理解だけで伝達意図の把握ができるのであれば（つまり、会話含意が全く存在しないのであれば）、問題はないが、両者の間に食い違いが生ずる場合、会話含意の解釈・理解によって伝達意図の把握をしなければならない。そして、日々の会話において、全く含みを持たせずに話すことが日常的で、一般的で

あるとは言い難いので、協調の原理と会話の原則との関係で会話含意を解釈・理解し、それにより伝達意図を把握することが重要になってくるのである。

グライス会話含意理論では、以上の説明で明らかであろうが、言語的側面はほとんど顔を出さず、問題にされることはなく（コミュニケーションの手段として、伝達意図を運ぶ単なる道具にすぎず、しかも伝達意図把握には言語以外の、会話場面における様々な要素の解釈が大きな比重を持つことになるので）、言語使用の側面が中心となり、とくに実際の会話場面が前面に出て、話し手と伝達意図と聞き手の関係、そしてコミュニケーションの為の単なる手段にすぎない言語が色濃く映しだされている。その意味で、会話における基本型を極端な形で示していると言えるかもしれないが、ただ前述の二理論よりも実際の会話により即したものであることは確かであろう。

以上の三理論を比較すると、日常言語を対象とした理論で、言語使用理論であるという共通点を持っているが、その相違点は、簡単に言えば、次のようなことであろう。ストローソン前提理論、オースティン言語行為論、グライス会話含意理論へと移行するにつれて、言語的要素の占める比重が低くなり、逆方向に見れば、高くなり、それとは反対に、実際の会話状況における話し手と伝達意図と聞き手の関係が占める比重が高くなり、逆方向に見れば、低くなる。そして、オースティンの分類を使用すれば、ストローソン前提理論が意味行為段階の指示と用語行為段階の意味を対象とし、オースティン言語行為論が発語行為段階（音声行為段階、用語行為段階、意味行為段階）、発語内行為段階、発語媒介行為段階全てを対象とし、グライス会話含意理論が発語内行為段階を対象としていることになる。更に、ストローソン前提理論が会話における基本型を部分的に表わし、グライス会話含意理論がその基本型を極端な形で（言語的要素の占める割合が非常に少ないという意味で）表わし、オースティン言語行為論がその基本型を最もよく、均整のとれた形で表わしている。これらの相違点からどの理論がより適切であるかを即断することは、

得策とは言えないであろう。むしろ、それぞれの理論が持つ意義と限界を認識することの方が重要である。ただ、言えることは、言語的側面と言語使用的側面の両者ともが重要なのであって、どちらか一方に偏りすぎるのは危険で、その意味で、オースティン的な言語行為論の方がより適していると言えるかもしれない。勿論、研究者が研究できる範囲には限りがあり、従って日常言語理論あるいは言語使用理論を言語的側面が中心的位置を占めていないという理由だけで批判することはできず、むしろその扱い方を問題にすべきであろう。ともかく、オースティン、ストローソン、そしてグライスの理論的功績の大きさは、誰も否定できないものであり、今なお彼らの理論が果たしうる役割は大であると言える。